

高山の文化を高めた人々

No. 67

父、土田吉左衛門について

土田 貢

父吉左衛門は、明治四十年（一九〇七）高山市に生まれ、旧制尋常小学校、高等小学校卒業の後、家庭の事情で進学を諦め、十五歳で代用教員の道を歩みました。

しかし勉学の志高く、学校に勤務しながら検定試験の勉強に励み、専門学校資格検定試験（専検）に合格しました。次に文部省教員検定試験（文検）に合格した時は、三十歳を過ぎていて結婚もしていました。夜中に急に飛び起きて「寝ている場合じゃない」と机に向かったそうです。私が中学三年の頃、父は「俺はお前の年には先生になって年上の生徒を教えていた」と言っていました。

代用教員時代、清見の大原おのぼろに勤めていて、休みになると登り下りの激しい旧街道（片道約四十km）を毎回高山まで歩いて帰り、また戻ったそうです。一度、吹雪で遭難しそうになり「お助け小屋」で一晩明かして助かった話も聞きました。

二十代の頃、国語辞典やアイヌ語の研究で有名な金田一京助先生が来高され、父が飛騨を案内しました。先生は「土田君、言語は時間と共に変遷するから、今のうちに言葉を留めておかないと消えてしまうよ」と言われ、以来三十年間飛騨の方言を収集しました。



S62年末、生地温泉「たなかや」にて

吉城高校在職中の五十二歳のとき、「飛騨のことば」という辞典を自費出版しました。「舟を編む」という辞典

を作る小説を読みました。この作業を仕事の合間に父が一人でやったという事に、感慨深いものを感じます。辞典を作る過程で、それにまつわる郷土史学、考古学、古文書等を独学で研究して、五十五歳のとき、「飛騨の史話と伝説」も出版しています。

六十歳で退職しましたが、在職年数は四十五年に及び、県下ではかつてない記録でした。退職後は「山は黙っているからいい」と、昔から育成管理してきた山林の仕事と畑仕事をし、晴耕雨読の余生を望んでいました。しかし、六十五歳のときに学芸員の全国公募に申請し、上京しました。千葉の松戸の寮から東京の上野の博物館へ通って学芸員資格を取ったようです。

国府町の依頼で「国府町の文化財」の執筆をしたのは六十六歳、それから「飛騨の民謡」を自費出版します。七十歳を過ぎてから宮川村より村誌編纂を依頼され、高山から宮川村まで毎日通い、数年をかけて「宮川村誌 上・下・資料編」全三巻を完成しました。

七十五歳の時、南宮大杜宮

司の宇都宮氏がお見えになり、「天皇陛下御在位六十年記念事業として、岐阜県の神社体系の本を作りた。それにあたり、飛騨の神社四百四社の分をお願いします」とおっしゃられ、快諾して「飛騨の神社」の執筆を始め、出来上がったのは八十歳になってからでした。



著書の一部

八十二歳で「古文書の読み方」を出版してからも、朝から晩まで原稿を書いていた。父に聞くと「昔出した『飛騨のことば』は、慌てて出すぎて内容が少ない。あれから資料を充分集めたので、上・下巻の『飛騨のことば』を出すつもりだ」と張り切っていました。ところが、平成四年の冬の朝、心筋梗塞で亡くなりました。前日、た行の原稿の校正まで終えていました。享年八十五歳。